

「んっ…はむっ…んんっ…」

私が彼女の舌を絡め取ろうとすれば、彼女の舌も私に絡みついてくる。

私が彼女の頭を抱き寄せれば、彼女も私の頭を抱いて、唇同士が一層厚く重なり合う。

私達の間で、行き場を失った胸同士が押し合い、歪んで、溶けるような熱を帶びている。

「「はあっ……んちゅっ…ちゅっ…んっ…あっ…はっ…」」

どれだけ重ねていたか分からない唇を離すと、互いの唾液で橋が架かつた。

胸の高鳴りも、体のうずきも、もう戻りきれないところまで來ていた。

「…自分とキスするの、そんなに気持ち良い？」

「…貴女こそ、ずいぶん興奮してゐみたいよ？」

目の前にあるのは、いつも鏡で見慣れた顔。その頬に貼り付いた、長く流れる
ような黒髪をそつと指先で払つてあげると、当然のように、彼女も私の頬から
髪を払つてくれる。

「興奮してるのはどつち？さつきから、固いのが当たつてるけれど？」

「こんなに固くしていいる貴女に言われたくはないわ」

「んつ…はあつ…んんつ…」「はあつ…んんつ…んつ」

私が、彼女の体に腕を回せば、彼女も私の体を抱きしめてくる。さらに押し付
け合わされた胸が形を変える。時折乳首同士が擦れ合つて、腰が落ちるような

快感が走つた。

「はあっ…んつ…私がこんな変態だなんて、思つてもみなかつたわ」

「んつ…はあっ…私も、私がこんなに淫乱だつたなんて、想像もしていなかつたわ」

そう言い合つて、私は目の前の私と再び唇を重ねる。

「「はむつ…んちゅつ…んんんつ…はあっ…」」

再び重なつた唇の中で、私は私と舌を絡ませ合う。

非現実的で背徳的な、そして甘美で淫靡なこの行為に、私はただただ、没頭していた。

昼間私は、最寄り駅前の商店街で、見慣れない雑貨屋を見つけて、何かに誘われるよう立寄つた。他の客が見当たらない店内には、お香が立ち込め、

どこのものとも知れない民族雑貨が無数に置かれていた。

カウンターの内側にいた、妙に色気のある店主が私を呼び止めて、頼んでもいないのに、小さな何かを出してきた。それは、銀細工のブローチのようなもので、真ん中に不思議な色をした石がはまっている見たことのない「なにか」。でも、私はその石に魅入られたように、気が付けばその「なにか」を5000円で購入し、足早に帰宅していた。

着替えも済ませないままに、小さな紙袋を開いた私は、一緒に入っていた説明書きを読んで、秘めた欲情が滾るのを抑えきれなかつた。

（分け身の鏡守）

・このお守りは、分け身の鏡守です。鏡に貼り付け自分の身を映すと、身分け

- することができます。
- ・石が付いている方が正面、台座側が裏面になります。
- ・正面に向けて鏡に貼り付けると分け身、裏面に向けて貼り付けると分け身を解除することができます。
- ・周囲に人がいない場所でご利用ください（鏡に映った人物すべてを無条件で分け身にする効力があります）。
- ・分け身の状態でいずれかのご自身がケガや病気になつた場合、解除してもその状態は継続します。分け身状態で両者がケガや病気になつた場合には、解除後はいずれの状態も継続されますので、解除される際にはご注意ください。
- ・合わせ鏡に貼り付けると最悪の場合、死亡する恐れがあるのでおやめください

い。

そう、つまり、その小さなお守りは、身を分ける・私を増やすことのできるものだつた。

そして私は、胸の高鳴りを抑えきれずに、すぐさまそれを鏡へと貼り付けていた。

パツと目の前が明るくなつた次の瞬間、目の前にいたのは、鏡で毎日見かける女性。長い黒髪に、紅潮した頬をした顔。適度に張りのある胸に、引き締まつた身体と、長く伸びた腕と脚。夢でも幻でもなく、これまで何度も劣情を抱いた、もう一人の私・私自身だつた。

そして、それから今に至るまでには、そう長い時間は必要なかつた。

「こんなに濡れてるわよ…？」

彼女がその細い指を私の秘所に這わせて、耳元で囁く。

「貴女こそ、こんなに濡らして…もう入れてほしいの？」

私も彼女に囁いて、彼女の秘所に指を這わせる。

私達の秘所はもうすっかりほぐれていて、少し力を咥えるだけでも、指先がヌルッと中へ入りこんでいく。

クチュクチュツ

「んんっ！」

私は、駆けあがつてくる快感に思わずそう呻いて、彼女の体にしがみつき、その肩に歯を立てていた。同時に彼女も私を抱き寄せて、私の肩に歯を立てる。

快感に体が震えれば、それによつて体が強張つて、私と彼女の白い肌に、彼女と私の歯が食い込む。もう、それすら、この行為の喜びだった。

「欲しいんでしょ、ここに？」クチュクチュ

「貴女こそ、ここに入れて欲しいんでしょ？」クチュクチュ
私達は肩から口を離し、額を押し付け合つて、囁き合う。

「欲しいって言つたら、入れてあげるわよ？」クチュクチュ

「貴女が欲しいんでしょ？こんなに濡らしちゃつて…ほら、欲しいって言いなさい？」クチュクチュ

指先を出し入れして、私は目の前の私を責め立てる。でも、当然彼女も私を責め立てて来る。秘所の入り口を何度も叩かれ、そのせいで、腹の奥がムズムズ

とうずいてしまっている。

意地の張り合いは、不易だろう。私は、彼女の前髪を空いてるほうの手でつかんだ。目の前の私の顔が、このあとどうゆがむのか、それを見届けたかったからだ。でも、私と思考も同じ目の前の私も、前髪をつかんできて、お互いに見つめ合う状況になる。これで良い…こんなことで、差がついてしまうような相手では、面白くない。

私は、彼女の中に人差し指を突き込んだ。同時に、私の中にも彼女の指が押し入ってきた。

「あっ！んっ…んんっ…んんんっ！」

「はあっ…はあっ…はあっ…」

「「どう？気持ち良いんでしょ？」

「「真似しないでもうえる？気持ちいいのは、貴女でしょ？！」

さらに私が秘所に二本目の指を差し入れれば、彼女も私の中に二本目の指を差し入れて来る。

二本の指で彼女の膣内（なか）の最もザラつく部分、私が一番好きな個所を指の腹で一気に擦りあげた。

「「これで、どうつ…んつああつ…はあつ…あつ…ああつ…んんんつ」」

同時に彼女の指も私のスポットに擦り付けられてしまう。

弱点同士の責め合いは、そう長くは続かない。

「き、気持ち良いくつて、認めなさいよ…はつ…くつ…ううんつ」

「認めるのは、貴女の方よ……ああつ……ううんつ……んんんつ」

「ほ、ほら、はあつ……んんつ……イ、イキそうなんでしょ？」

「ぜ、全んんつ然……貴女は……はあつ……もうイキさそうみた、い、だけれど？」

「わっ、私のクセに、んんんつ……淫乱女なんだから……ああつ……早く……イキなさい……んんつ！」

「貴女こそ、先にイキなさ……ああつ……いよ、この淫乱女……はあつ……あつ……んん

んつ！」

彼女の指はしっかりと私の膣内（なか）に差し込まれ、確実に私のスポットを擦り続ける。私も負けじと、彼女の膣内（なか）の彼女の弱点を責め続けた。

「は、早く、イキなつ……はあつ……さい、よおつ！」クチュクチュ

「貴女が、イキなさいっんつ…ああつ…んん！」クチュクチユ

「あつ、んんつ、くつ…はあつ…んんんつ！」「くつ…はあつ…あつんんんつ！」

クチュクチユ

「あつ…あつ…ダ、ダメ…んんんつ…イクつ！…イつ…クウ…!!」

子宮の中が収縮し、ビクンビクンと痙攣を始める。その快感に私はこうえきれず、彼女の体にしがみついていた。彼女もまた、同じように体を脈打たせ、私にしがみついてきた。

私達は、抱き合い、互いの膣内（なか）に指を差し入れたまま、体を震わせ、その波が收まるのをじっと待っていた。

ほどなくして、私達はどちらともなく、体を離す。

今まで抱き合っていて見えなかつたが、もう一人の私の目は、まだ枯れてない。そう、私が求めていたのはこんなものではい。

私は、もつと激しくもつと強烈に

以下分岐

- ①「私自身と交わりたかった」
- ②「私自身との喰い合いを望んでいた」
- ③「一方的に汚してしまいたかった」